

GRAND OPEN!

Café des

三浦一族



Menu

第1回

三浦本宗家の歴史

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

今回から、新コーナー「Café des 三浦一族」が始まります。このコーナーでは、三浦一族にまつわる歴史やエピソードなどをご紹介します。三浦一族について、興味や関心を持っていただけるように様々なテーマでご紹介していきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

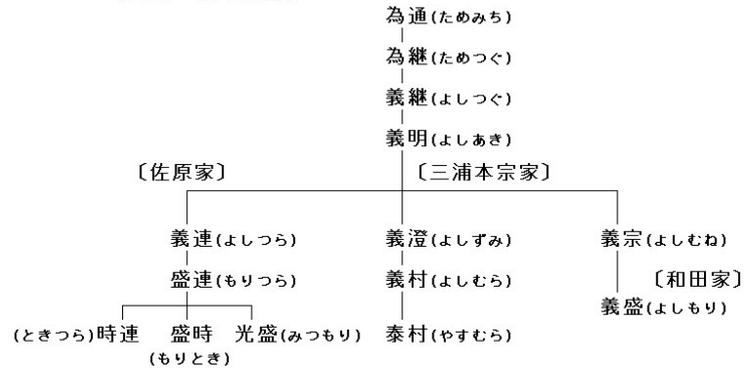
さて、初回は、三浦一族の中でも本宗家の歴史を中心にをご紹介します。鎌倉時代以前の三浦一族については史料が少なく、よく分かっていないことも少なくありません。例えば、三浦一族の出自については、桓武平氏あるいは藤原氏の系譜ではないか等の指摘がありますが、必ずしも明確ではありません。また、三浦一族の始祖も、為通と記す系図がある一方、為通は創作された人物で為継を初代とみる研究もあり、こちらも確実なことは分かっていません。

このように、三浦一族の草創期については、今も不明瞭な点が残されていますが、少なくとも義明の頃には、三浦氏は国衙(くにが)の様々な雑事に関わっていたと考えられています。国衙とは、律令制で諸国に設置された政庁で、国司が政務を行った役所のことをいいます。義明は「三浦介(みうらのすけ)」とよばれる地位を得て国衙の雑事を統括する有力者となっていきました。

義明の子義澄は、平清盛と源義朝らが戦った平治の乱(1159)において義朝方に与しました。また、治承4年(1180)、源頼朝が伊豆で平家打倒のため挙兵した際も、当初から頼朝方に与します。この時、義澄らは、頼朝勢に合流するため箱根の石橋山に向かいますが、大雨による増水で酒匂川を渡河できず石橋山の合戦には間に合いませんでした。その後、衣笠合戦で父義明は没しますが、義澄ら一族は安房に逃れ、頼朝勢と合流しました。その後、千葉勢や上総勢らが加わった頼朝勢は大軍となり、ついに鎌倉入りを果たします。

頼朝は、平家追討を弟の源範頼(のりより)や源義経らに任せ、彼らを西国に送り、三浦一族もこれに加わりました。一族の佐原義連は、一ノ谷の合戦において、義経と行動を共にし、急峻な崖を真っ先に駆け下ったとされ、また和田義盛は範頼勢の侍大将をつとめ、屋島の合戦や壇ノ浦の合戦などで活躍し、その後の奥州合戦においても、阿津賀志山(あつかしやま)の合戦で敵将藤原国衡(ふじわらのくにひら)を射抜く武功を挙げました。一方、一族の長である義澄は、精兵を有し手勢も多かったことから、範頼が周防国(現 山口県)から豊後国

【三浦一族の系図】



(現 大分県)に進軍した際、周防の守備を任され、また、義経の命で壇ノ浦への地理案内の先頭をつとめるなど、求められた役割を着実に果たしました。

義澄は、頼朝からの信頼も厚く、初期鎌倉幕府において、重要な役割を果たしています。「宿老」と呼ばれる幕府の重鎮の1人で、その中でも筆頭格でした。また、朝廷の勅使が持参した頼朝の征夷大將軍の任命書を受け取る大役に抜擢されたほか、13人の合議制のメンバーの1人になるなど、幕府の草創期を支えました。

その義澄も、頼朝が亡くなった翌年の正治2年(1200)に没します。頼朝没後の幕府は、御家人同士の対立が激しくなり、様々な事件や政争が続いていきます。義澄の跡を継いだ義村は、梶原景時の乱、比企氏の乱、畠山重忠の乱、和田合戦、承久の乱等の様々な政争に関わります。和田合戦では同族の和田義盛、承久の乱では弟の三浦胤義(たねよし)と決別することとなるも、義村は北条氏側に与し、その戦いを勝ち抜くことで三浦氏を北条氏に匹敵する存在へと押し上げていきました。実際、三浦氏と北条氏は、婚姻関係で結ばれており、そのつながりは大変強固なものでした。

しかし、義村が没し、子の泰村の時代になると、5代執権北条時頼(ときより)の外戚(がいせき)であった安達氏らと対立し、宝治元年(1247)の宝治合戦で三浦本宗家は敗北し滅亡しました。以後、時頼方に与し生き残った佐原家が、室町戦国期まで相模の三浦氏として生き残っていくこととなるのです。

【参考文献】横須賀市『新横須賀市史 通史編 自然・原始・古代・中世』(2012年)、高橋秀樹『三浦一族の中世』(吉川弘文館、2015年)